伊勢物語 下

和書門 類
特別 號
一九一一七 號
第六十番 函
架
二 冊

内閣文庫
番號 和 19117
冊數 2 (2)
函號 60 17

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

すゞしさはもうとのゆとおかゝし　宗

なかれの原を見まはて

うらかはのこ旅よりふみ越るかはの宗哉

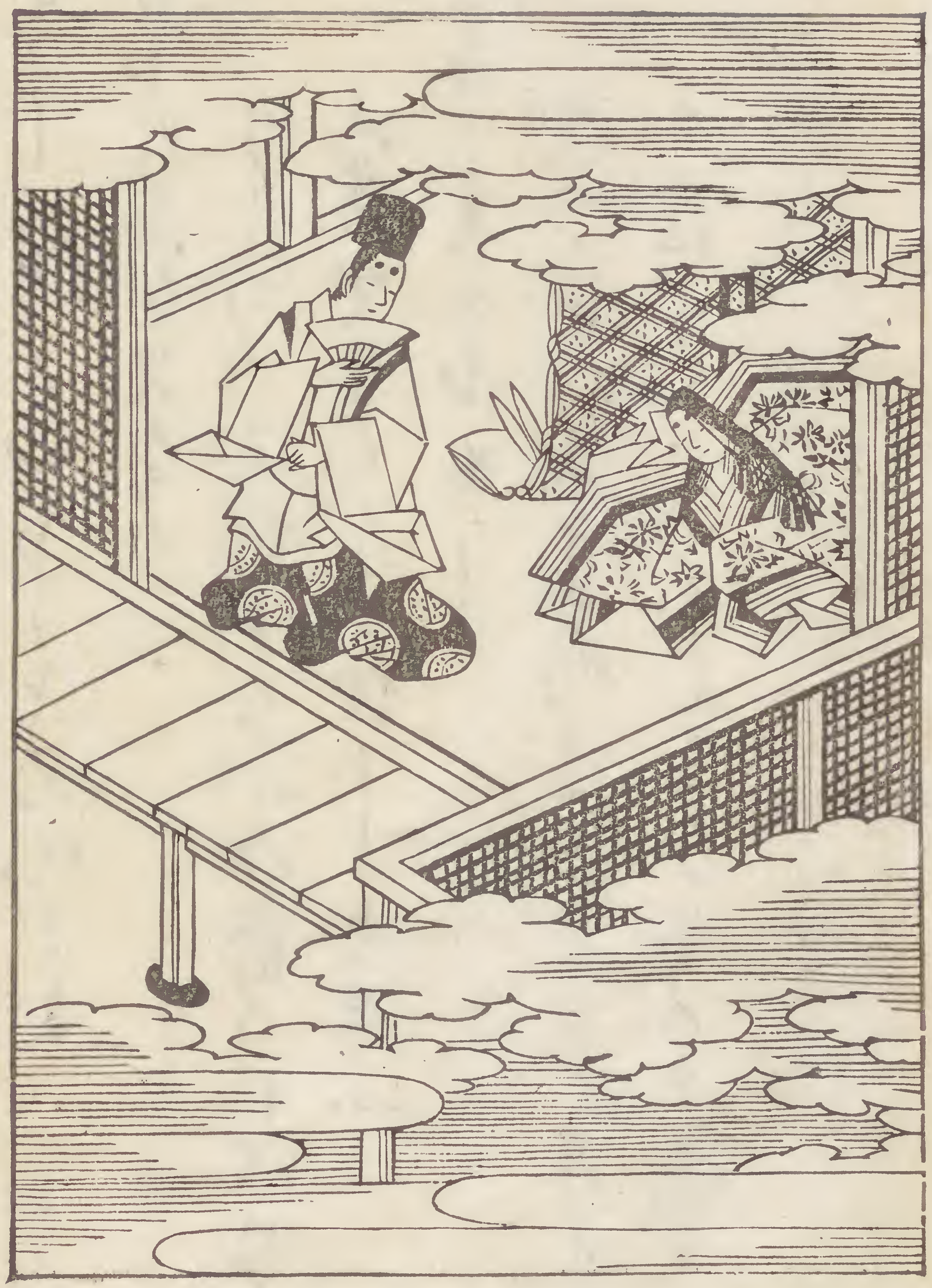
人麿せ寸なんこと哉しそゑよ

ゆきこえりゆゑし

はつ宗此あとめつゝ志きこそ乃えせ

う雁なくとのをかもひゐつゝ那し

むかし男ありけりうらむる人をうらみて
とりのこをとをづゝとをはかさぬとも
おもはぬ人をおもふものかは
といへりければ
あさ露はきえのこりてもありぬべし
たれかこの世をたのみはつべき
又おとこ
ふく風にこぞのさくらはちらずとも
あなたのみがた人の心は



み女遊し
ゆく水にかずかくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふなりけり
哥さたとき
行水とてよりひとちなきふと
いろまへてふとも我きくと舞
あたらくまをうりまけ成おやざゝ女のし
ろひあわきしりなことたり乞し

むかし男人のせんさいに菊うへけるに
うへしうへは秋なき時やさかさらん
花こそちらめねさへかれめや

昔おとこありけり人のもとよりかさり
ちまきおこせたりける返ことに
あやめかり君はぬまにそまとひける
我は野に出てかるそわひしき
とてきしをなんやりける

昔おとこあひかたき女にあひて物
かたりなとするほとに鳥のなけれは
いかてかは鳥のなくらん人しれす
思ふこゝろハまた夜ふかきに

昔男つれなかりける女にいひやりける
行やらぬ夢ちをたのむたもとには
あまつ空なる露やおくらん

昔男思ひかけたる女のえうまし
うなりての世に
おもはすはありもすらめとことの葉の
をりふしことにたのまるゝかな

昔男ふして思ひおきて思ひおもひ
あまりて

わか袖はくものいかゝるにあらねとも
　くるれは露のやとかなかりけり
むかしおとこ人しまぬもおもひあわ
はまなよ人乃もとに有り
　恋わひぬあま乃うるもにやといてぬ
　我から身をもくたきつる哉
若こうろはきてところに隙をおかさこふり
をかといふ所入りいゑはらかてを里けわ
まこ庭となわふわけり宮りこ有りこゆも

なに女とも地ぬるふりなわけれた田うりん
とそこ乃男はあり状見ていみし乃にあも
のこ志をはやとそあはまりていわきけき
はこの男にけておくてかく神よけれは女
　あきよりわ何をきいく色のやとふきそ
　すみけん人乃をと流きもせぬ
思ひひてこれ宮入何川まりよのんあわ
け神は木とこ
　すくておひてあきたて霜のうきたまへ

ふりにもおりけれたくなかれかわ、
とそなんいひしうわれ風に深如ともか
ひ詞りんといひん風也ハ
うちまひておちほはろふ家かまさハ
王神もたゝみゆりましとのを
せりしおとこ京をいつく思ひ世ねんのし
山月にはませとおもひいりて
寸見見ひぬいまのわか山さと
君をのこりんきやともかそむ

かくて物いひけるやうにて志にいわゆりはき
えたもてよれうきみとさそいたいそ
かりうんよ露をくみ寸一河まの川
とわたる風のひとつ一流くり
にな人いひていさいそよみの歌
若おとくあり家わ室つかんいうしく
心もまめなるさわん風かと乃いんとう志
はめりおもえんといふ人にはむ人の
くたへいる常わこおやこ字佐乃つりひ

にていきけるにあるくにのしそうの
官人の妻にてなむあるときゝて女あるし
にかはらけとらせよさらすはのましといひ
けれはかはらけとりて出したりける
にさかなゝりけるたちはなをとりて

　さ月まつ花たちはなのかをかけは
　むかしの人の袖のかそする

といひけるにそおもひいてゝあまになり
て山にいりてそありける

昔おとこはくしまていたらわれける有
こ淋そいわこほむといふはなもみやすた
さの乃うちなる人のいひける歌をきて
うめ川をわさらんやと乃いそかは
さになりてふここその歌うけれ
如ゑし
名はおけてあるにうあるひと先うきも路
なくの乃ぬれしあぬきりといふなり
すうし年ゝ経をと流さわれりぬれし

こゝやかしこゆかんとてかなたの人のことく
流落た人のくすなわりたる人に流かれまで
もとめし人々まへよいそきてあおくは
せうとしりわよきわこれを流すりはさ所
へとあすしはいひけり神ハ登こせうか車の
おとこ和まるハ志てりにはとて
つる志へ乃にかひハいつうさくら花
こゝろうしもなわに有乃都
此いふをいとえつりしとおもひていふ羅ハ

国立公文書館 National Archives of Japan

もせてゐたるをなといらへもせぬといへ
は涙のこほるゝにめもみえす物もいはれ
すといふ
これやこの我にあふみをのかれつゝ
とし月ふれとまさりかほなき
といひてきぬをぬきてとらせけれとすてゝ
にけにけりいつちいぬらんともしられ
すむかし世心つける女いかてなさけあらむ
男にあひえてしかなと思へといひ

いてむもたよりなさにまことならぬ夢
かたりをす子三人をよひてかたりけり
ふたりの子はなさけなくいらへてやみぬ
三郎なりける子なむよき御をとこそ
いてこんとあはするにこの女けしき
いとよしこと人はいとなさけなしいかて
この在五中将にあひてしかなとおもふ
心ありかりしありきけるにいきあひ
てみちにてむまのくちをとりてかうかく

なんおもふといひけれはあはれかりて
きてねにけりさてのち男みえさりけれは
女をとこのいゑにいきてかいま見けるを
をとこほのかに見て

もゝとせに一とせたらぬつくもかみ
　われをこふらしおもかけにみゆ

とていてたつけしきを見てむはら
からたちにかゝりていゑにきてうちふせり
おとこかの女のせしやうにしのひて
たてりて見れは女なけきてぬとて

さむしろに衣かたしきこよひもや
　こひしき人にあはてのみねん

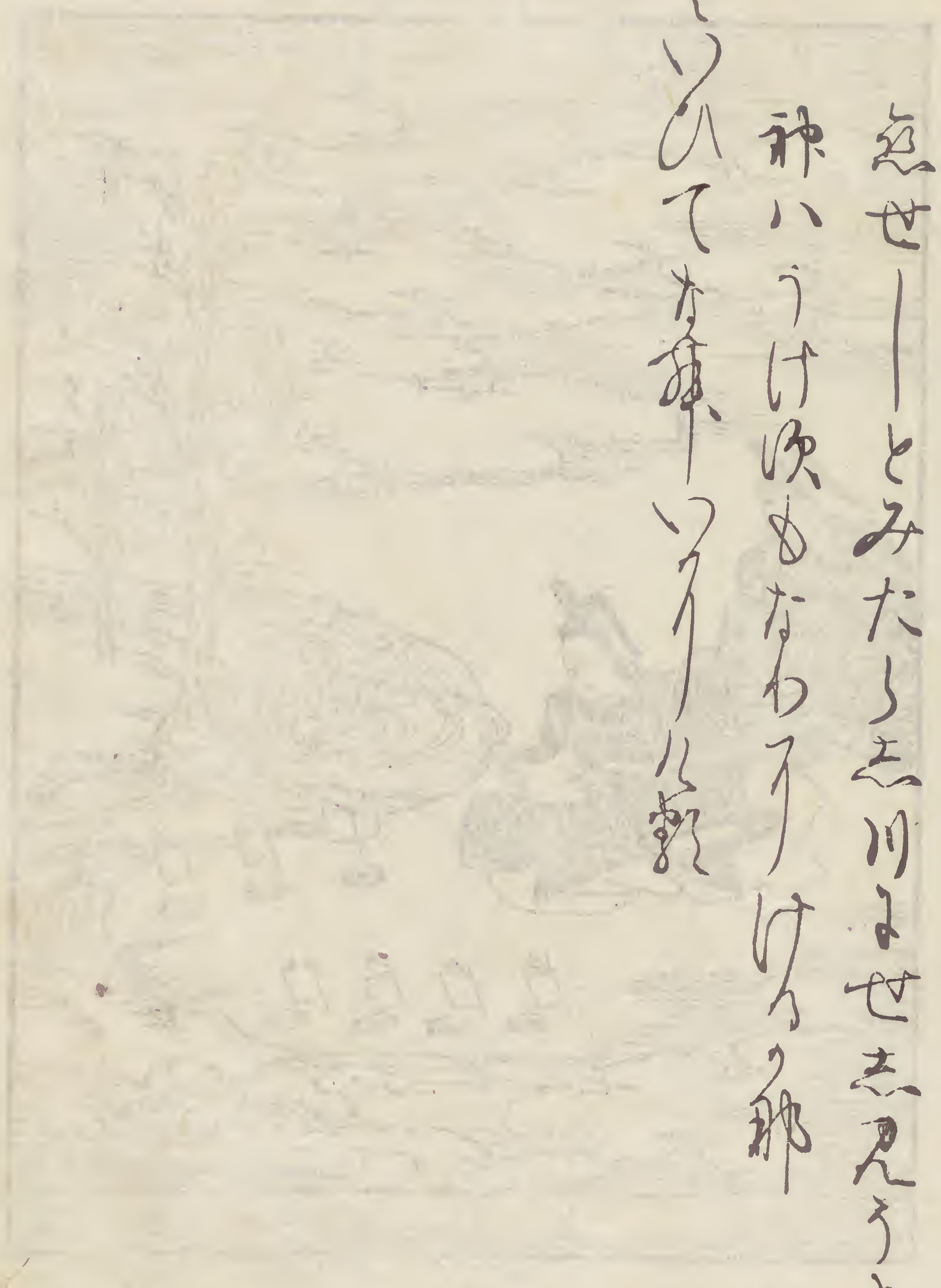
とよみけるをおとこあはれとおもひてその
夜はねにけりよの中のれいとして思ふ
をはおもひおもはぬをはおもはぬものを
この人はおもふをもおもはぬをもけちめみ
せぬ心なんありける

昔おとこみそかにかたらふわさもせさりけれ
はいつくなりけんあやしさによめる
吹風にわか身をなさは玉すたれ
ひまもとめつゝいるへきものを
返し
とりとめぬ風にはありとも玉すたれ
たかゆるさはかひまもとめへき
昔おほやけおほしてつかうたまふ
女の色ゆるされたるありけりおほみやす

世所とていまにかはれる所いとこなむある
殿上有りきぬるひまかりしに里の所
おやさこのまさいせうのかはる事をこの女
あひしあらはれり男女のたゆるはまさり
けさはぬの御所有りおそむるひまかはる
秘そ女いとかゝるなかの君もほろひなん
りく　ふきうといひける
思ふよし人よしありふすことゝて下けよける
あふみよしかくれさもありしハあまた

といひてはうし　におはしたる海へ秘はれい
乃ちのみきうしよ人のありやもしらて
のおはぬ里の秘い〻乃女おもひまひて里ハ
ゆくきまさは明より漂よきこゝとおもひて
いきかよひ里の秘ハみえ人きてあらひけ
見侍とうそとのもつさその所よく侍え
とわてたくありあけいとてみほかぬあく
かさはのし侍こあは見所よこもいさ
侍りふなかぬへ里の秘ハ侍ぬるほろひぬ

亀しとてこそたとこいてのゑりを見かす
かくは心ろめ路へ出かとん神にも申しん
まとのやまさわりのこたわしはくふを
王里戦く恋しうのこたわしん飛ハおん
座うしかんふよりひて急せしといふ
りし亀のくしてなんいてさん流りし
へん誠まくにいゆくのふしよこそかん海
さわてあわしいわれ有こひしくの
みおほえんまハ



急せしとみたらし川よせしみんうき
神ハうけ次もなわすけりの那
ゆいひてな舞いつりん誠

らはえなと人ハりかなからちよくおもえし
悔してかと宗の海たまは心ありいまては
こゑハいとたうとくて中将のまきて
ぬハいつうあよ人わかくうき見よ给かう
まつりてれくせはさなくかなしきこやさ、
乃たとく有りほさきまてとてなんなれ
もりかなほとにみかとまきしめ志つけ
てこの男をはなかし流りしてけれ
ハこのめのいやこの宮に前女をハ悔かて

はるかくるにこゑてし すみだ河ふちはた
くるありとも見てなく
かなのりもはれ世ゐのまゝかると
ゆきをこうなりめ世ほくはうる見し
となきをまちこの井ここ人のくにゝわ
殊にとりきはゝふえをいとおもしろく吹
きゝては おりしうて男ありきまいりしう
かひりかゝきはゝ此女見くるにこもわ
あわうられありあかたとよきけとあひ

見ゐへ寄りけもあしてなきまに後
さわとも心ふらんこうかしけれ
ありけもおもしぬ乃哉しけれしも
と思ひわれ男た女をあま祢をほく志るか
よ清く人のくまこありあそうしうさ好
いさほうまゆかて無おぬる物ゆへ小
見まくほしさにいきあまた清ゝ
小のお深山とさなたへしは宮はむ所も
うめとみくなそよかわ面楽のききなとも

昔おとこ津のくにゝしる所ありけるに
あにおとうと友たちひきゐてなには
の方にいきけりなきさを見れは舟とも
のあるを見て

なにはつをけさこそみつのうらことに
これやこの世をうみわたる舟

これをあはれかりて人〳〵かへりにけり

昔おとこせうえうしに思ふとちかい
つらねて和泉の国へきさらきはかりに
いきけりかうちの国いこまの山を
見れはくもりみはれみたちゐる雲やま
すあしたよりくもりてひるはれたり雪
いとしろう木のすゑにふりたりそれ
を見てかの行人の中にたゝ一人
よみける

きのふけふ雲のたちまひかくろふは
花のはやしをうしとなりけり

むかしおとこいつみのくにへいきけり
住よしのこほり住吉乃さとすみよし
乃はまをゆくにいとおもしろけれハおり
ゐつゝゆくある人すみよしのはまとよ
めといふ
かりなきて菊のはなさく秋はあれと
春のうみへにすみよしのはま
とよめりけれハみな人よますなりに
けり

昔おとこありけりわかきのおやさいつ物のこゝに
まりのはしひとつはりけりあはせ
藤原なりけるひとのおやつまの住のひ
よわハこの人よくいさきよといひやまむ
けれはたゝやの事なれはきゝいひて祈ん
こ給入りいさきありけりうしたまへりけりに
いつしたてゝやかゆみさかハりつかはし
さこまこさせけりかくてねんこ給まいる
はよ出かにはといふ乗おとこまゐてあ

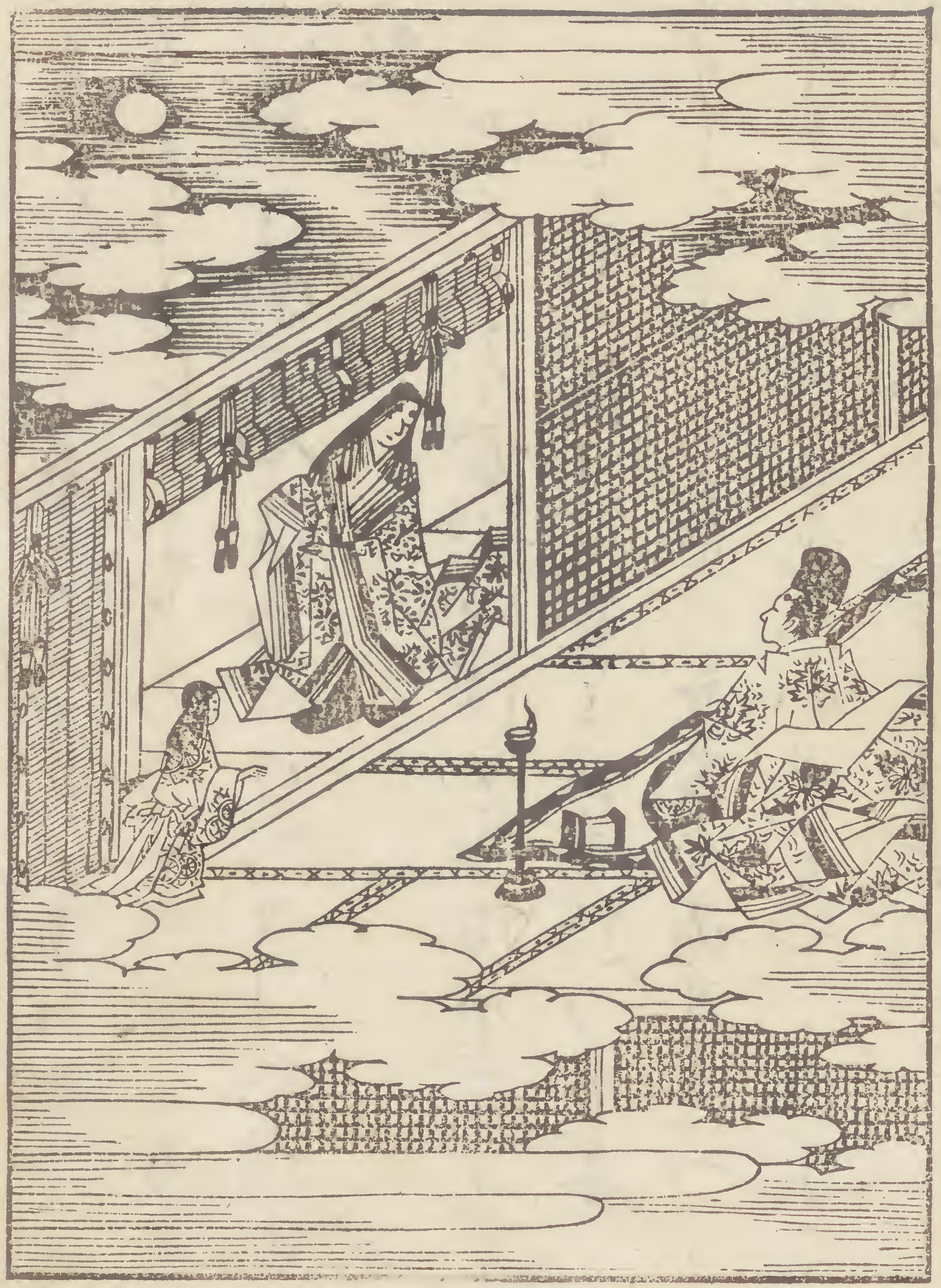
りんといふ女もはたいとあはしとも思へらす
されと人めしけゝれハあはすつかひ
さねとある人なれハとほくもやとさす女
乃ねやもちかくありけれハ女人をしつ
めてねひとつはかりに男のもとにきたり
けり男はたねられさりけれハとの
かたを見いたしてふせるに月のおほろ
なるにちいさきわらはをさきにたてゝ
人たてり男いとうれしくてわかぬる所

にゐていりてねひとつよりうしみつ
まてあるにまたなにこともかたらはぬに
かへりにけり男いとかなしくてねす
なりにけりつとめていふかしけれと我
人をやるへきにしあらねはいと心もと
なくてまちをれは明はなれてしはし
あるに女のもとよりことはなくて

君やこし我やゆきけんおもほえす
ゆめかうつゝかねてかさめてか

なとくいはれいつうあまてよみ風
　まきくらすかのやゝ有まとひよ花
夏うはことハこゝろひさためよ
とよみてやりてかはりいそぬ野にすわ
れ此んハうらにてこよひさふ人しつめ
てはくくわりん此也ふにくたのかこいは
きの宮のうみうけ人郡かりは恨かひあり
ときそて拗ひとよきれのこし比まくも
いふあひこそもえ拗へかけ無ありかの國

通からなんとにも六ねとこも人志ほの
ちのは坂をふかせとえあうは此拗やうく
あれなんとするかと有し　女かさらわ
いふさすさのはきのさうりうつ銭かさて
いうしふうわとわて見神ハ
　かち人履わまれぬまあえすし御まへ
ともよて此恩ハあしうはさのはきのさう
有はまはまは乃は見してうえはた
をりまはく



みやふさかのせきハこしなん
とてあくれそおハ里のくまハこえにけり
升寺然小隠おの隠ときさ文徳天皇の内女こ
殿よりはみこのいもうと

むかしおとこ子ありつらひよわかへりた
けり有りおほよとのわらありなとわ
てつゝきのこゝや深わらりく有りつひかけ
ける

みくめりの寺やつほこまりけかさして

三きよ城し恵らいつま社つわ毎

世りしおとこつ物の神官に肉乃清つゝひ
まそまいまりいに山不乃こゝや下ほなこと
といふ風女わさくしうとらへ

ちえやせつ神源いかきもここえぬ恵し

おほこや人乃思まし刹しさへ

おとこ

急志くハあてもえよりちいや山流

神の川させちみちなり深く有り

昔おとこいせのくになりける女又えあ
はてとなりのくにへいくとていみしう
うらみけれは女

おほよとの松はつらくもあらなくに
うらみてのみもかへるなみかな

昔そこにはありときけとせうそこをたに
いふへくもあらぬ女のあたりを思ひける

めにはみてゝにはとられぬ月のうちの
かつらのことききみにそありける

むかし男女を伊勢へつれうらみて
岩ねよりさなか山有あふとも
あかぬ日おほくこひわたりけり
むかしおとこいせの國にゐていきて
あらんといひけれは女
おほよどの濱におふてふみるからに
こゝろハなぎぬかたらはねども
といひてましてつれなかりけれはおとこ
袖ぬれてあまのかりほすわたつ海の
みるをあふにてやまむとやする
女
岩間よりおふるみるめしつれなくは
志ほひしほみちかひもありなむ
又おとこ
なみだにぞぬれつゝしほる世の人の
つらき心ハそてのしつくか
世にあふことかたき女になん
むかし二条のきさきまた春宮のみやす

むかし世中の風とお氏神にまうでゝ給ふを
ありこの衛府にさぶらひけるおきな
人々の祿たまはりついでに御車より
たまはりてよみてたてまつりける歌
おほはらやを志ほの山もけふこそは
神世のことやもおもひいつらめ
とて心にもかなしとやおもひけんいかゞ
おもひの世きてはりけり
むかし田むらのみかどと申れこかどお
りしまし家ありし時藤女御たまき
こそやしれぬまうかわくりうれう給ひて
安祥寺にてみわざしけり人々さゝけ
物たてまつりけりたてまつりあつめたる物
ちさゝけはかり御堂うこりくのさゝれもみ
ぢ木の枝有りつけてうちのまへにたて
まさハ山もさらにたうのまへにうごき
いでたるやうになんみえける其れを
右大将にいまうかりけるふちはらのつね

ゆふとやしはいはなりてかうの名をいはれ
ほとにうらよむ人〲をめしあつめて
ゆみのこゝろをえらりて是れにさえぎり
うつてまはらせ給者の世の中のうへなる
にはおきふしめハたかひありしよふこには
山のこなたほとり里ゐにはあかすハ
されは乃かりに枕とふと乃名ろし
とよめるかには面をいは見まはすくもあり
さらはかうの名かりハこ秋やまき里にん

あこ乃道の里にわ
其のしふることに申には女房おほし一下
しにかう給はせ給てなくとあはぬかのこゝろおき
安祥寺にてし常わ右大将かちりて
つはゆふといふ人いまうすりにみえしのみ
まさにまうて給ひてかへさには山しふの
とむいしのみこたりしまいらせやまさまに
乃宮にたちおとし川はしりせなとして
本しかんくつらきたくよまうて給うて

年ごろよう有もはかうまでは殿とちか
くハ心あさはかうまつるまことゆひハこと
有りきこうりんとやしなをみこころ
うひ行ふてゝろのおましのまうけさき
銀たまふ流有しかの大ねそこたへ
かうまはふ屋う宮つゝへのりめりうこ
なをやハあるへき三条院おほこおほせし
時紀乃くにの千里乃たゞ有りあわなり
いかにおもろよりしたてまつれりきほこ

ゆふれのちさてハ流連しつハあるの人
ろぞこさうし乃まへのみうりんあか
し様志ハこ乃みこハふききあわこれ
いたをたてゝ海つらんとの張てこすいたん
と様里しそとわりつゝハ帰くりく
も明くてもてきぬ、ほいしきてし
よわはんすハまきまりこ神様、てにそ
まほろハすゝろなる雨てしどそ人く
にうとさらませさまふ名のむしまれうかなわ

ける人の哥なんあをきこけをきさみて
まきゑのかたにこのうたをつけてたて
まつりける
あかねとも岩にそかふるいろみえぬ
こゝろをみせんよしのなけれは
となんよめりける

せいしうちのなかにみこうまきをほつかり
ならはうふや有人々うたよみけり伝
松原ちかきなかれおきふのよみ歌
かの門よちひ詠歌のけをうへ達六
ふ伝あゆ達つかく神さうへ参り
これハ侍るかれ乃見こときける人中将伝
こそなむいひける歌あに乃中納言遊よし
伝ひそめのいしなり

せいしおやうろへ伝伊人ありしかちの花
うへたりけるあわれ蓮はよひの侍こもか
ありあ代日あめうほひる有人歌もとへ
おきてたてまつりしをとてよめる
ぬ飛侍そ志のそをかつる年の内に
まれハいくらもあらしとたもへは

むかし左のおほいまうちきみいまそかり
けりかも河のほとりに六条わたりに家を
いとおもしろくつくりてすみ給ひけり神
無月のつこもりかた菊の花うつろひさかりな
るにもみちのちくさに見ゆるおりみこ
たちおはしまさせて夜ひと夜さけのみし
あそひて夜あけもてゆくほとにこのとの
のおもしろきをほむるうたよむそこにあ
りけるかたゐおきないたしきのしたには

ひありきて人にこれよませはててよめる
しほかまにいつかきにけんあさなきに
つりするふねハこゝによらなん
となむよみけるハみちのくにゝいきたりけ
るにあやしくおもしろき所ゝおほ
かりけりわかみかと六十よ國のなかに志
ほかまといふ所にゝたる所なかりけりさ
れハなむかのおきなさらにこゝをめでゝ
しほかまにいつかきにけんとよめりける

せめしこれらかのことをやしとみこもは
しましけり山さためあまたるりこなせ
といふ心ところに宮河かわ年ことのさ
くらの花さとの里の人かれ宮へなせおり
雨し者うらの時見きの世ゆ乃かたんなわ
けなる人をつゐてりのそおはしましけ里
時うへそ久しくなるまけまいうか人震
名王す迄有りけわりハねんころまも
移へさけなを乃その見浅やまとうるり

かくまつりけわなかわりけりたのしなよは
乃いんうのぬんの桜ことりおもし清志
うけ本乃もとにおわみそえ子ををまさ里てう
さしてさしてうえなりしもこ成哥よえ
けわうけのうえなわゆうゝ人震よみ成
在仲にたし宮さくうの子かわせハ
ま親乃心ハのとけからまし
となんよみうけ成みひとみうき
ちまほこまりゝさくうハみそうけ成

うた有りなかにひきしかりへ家り
とてうの本乃もとハくちてかく成なりは
く飛有りかわぬ清ともゆかり人さ几城もさ
せて野らわりてきちこゆきけ字乃こ
てせとそよ紀阿城もと欠ゆくなり安海の
かまもといふ而りいふわぬみこにむまれ
り見たほこよ亦いるみこみくふまひ以て
かふのをりて阿まのかは乃かとわに以ゟ
ゞ新城たいつりてうたよみそさり清さハ

させとのゆまうゟま六かのむまれりみよ
見そそまつわけり
かわくしよ飛えたら欠よ端りしん
安海乃のりつ有我ハきにゟわ
みこうた城安こもし行うてり御し
えしさまりけきれ安わつゆ清とも有
清かりま清まり見えれりぬし
一と移にひとたひなまれきこは{て}ハ
やせかれ人もあらしとうなふ

かへりて宮にいらせたまひぬよふくる
までさけのみものかたりしてあるじの
みこゑひていり給ひなんとす十一日の
月もかくれなんとすれはかのむまのかみ
のよめる

あかなくにまたきも月のかくるゝか
山のはにけていれすもあらなん

みこにかはりたてまつりてきのありつね

おしなへてみねもたひらになりなゝん

やまのえ明くハ月もいとゝし秋
せのしらぬせにかすひ猶以しゝ神たらぬ
みゝ秋の乃りりしすおりしまれと
も有うまのかゝふるおきな流かうまつ
まりはゝ杯へて宮にかつかうらわ須秋
らわしてとくい本来と於もふに於ほみ
むゐふ下ひ於くをまりんとて流かえはさわ
らわゝ此せゝ乃かみ心もとふかわて
悔くるとてくるひきむもふゝともせよ

何よ乃秋とこすたのまゝなくに
とゝ見ゆるときハ尾すひ乃流こもわなわ
まわみこ於ほ晩涼ももりて身のし行てはけ
里かくし流く下うてつかうまつ里ゆ風
並おもひのかゝ有りゆくしお許し
た下うてゆるむ月またり見たてまゝらん
とて秋此有りまうてよ風にひえの山乃峰
もとなも大雲いやたりしゝみてみせろ
にまうてゝおりみるてまつるに流きく

とかくありくておとゝしましんでハ
やゝひさしくさすらひていりし庵
乃ことなどおもひそゝきこえやわさん
もさふらひてしうなと思へとおほや
けこととも、かはりく神ハえさふらひそゆふ
ぐれ有りかへりとぞ
われまそハ夢つとう思ふおもひよや
雲の見えわれてきゝを見んとは
ゆてなんなく〳〵よ有ける

宵たそかれかゝり男ハいゝ風しなりけるまゝ
なむ宮ふかわきよらしれくみのかといふ
所にけ見給ひかわ子ハ京入宮つ御意し
かま六波羅うつゆしかまとと志えくえ
ますくけひと此子まさく君わかハいと
うれしう志所ひかわ御はみしえもりのわ
にとみのことゝて傳せ見ん御覧たやまろさて
みまハうさかわ
たいぬまはさるぬ別のありといへハ

いよ／＼めてたくおもしき君の御
かの子保てうち所よてとよみ風
世俳よさるぬかの礼のなくもうな
子よもといの御人振ゝめた兒
世うしおとくあわかかは見ろえよわつかう
まつわかさき／＼流くしおろし給うて
かわけ月ま人のなろきまうて家わたは
風け乃宮流かへし／＼かれつ子所ハ
えまうてれさま此もろ此心字のしふりて

はうそけりになん彼里に成ほりし侍かう
下りし人のこなりぎんし所々あまる
まいりあはせまはてむ月なきほどことたらつと
ておほこきたまひけり由よこおれかこふて
わかくは思もすてりしやまとこ所ひと忘
みて雲有りわかこめる神たちといふ主題
にてったおわりわ

　思へとも君え志わけねハ御身の神さまゑ
　逢よの侍もちうわのうて詞なる

とよめり此世ハみそこいとにいそうあいきか
里行うて侍うぬ沢人たてへわむわ
世すしいとわりきたとこ中のよ女役所ひ
いへ里にわをのく　おやすく神ハ侍こ
見えていひ侍してやこに是わ年こ詞へて
めのもとにおきんさしハたさんしとや思
れんおやここう役よ見え座まり書わ

　今まてるわけきぬ人ハ西よりもありし
をのうちてくく年乃ハぬよ六

とてやみにけりおとこもめもおもひけり
まめ宮つかへになんいてにける
むかしおとこつの国むはらのこほりあし
屋のさとにしるよしゝていきてすみ
けりむかしのうたに
　あしのやのなたのしほやきいとまなみ
つけのをくしもさゝすきにけり
とよみけるそこの里をよみけるこゝを
なんあし屋のなたとはいひけるこの
おとこなま宮つかへしけれはそれを
たよりにて衛府のすけともあつまり
きにけりこの男のこのかみも衛府のかみ
なりけりその家のまへの海のほとりに
あそひありきていさこの山のかみにあり
といふぬのひきのたきみにのほらんと
いひてのほりてみるにそのたきものより
ことなりなかさ二十丈ひろさ五丈はかりなる
いしのおもてにしろきぬにいはをつゝ

つゝめらんやうになんありけるさる
たきのかみにわらふたのおほきさして
さしいてたる石ありそのいしの
うへにはしりかゝる水はせうかうし
くりのおほきさにてこほれおつそこ
なる人にみなたきのうたよますかのゑふ
のかみまつよむ

我世をはけふかあすかとまつかひの
なみたのたきといつれたかけん

あるしつきによむ

ぬきみたる人こそあるらししらたまの
まなくもちるか袖のせはきに

とよめりけれはかたへの人わらふことに
やありけんこのうたにめてゝやみにけり

かへりくるみちとほくてうせにし宮内卿
もちよしか家のまへくるに日くれ
ぬやとりのかたをみやれはあまのいさ
り火おほくみゆるにかのあるし
をとこよむ

はるゝ夜の星か河辺の蛍かも
わかすむかたのあまのたく火か

とよみて家にかへりきぬその夜みな
みの風ふきて浪いとたかしつとめて

うないゑの女乃こともいでゝうきみる乃
なみによせられたるひろひていゑのうち
にもてきぬめかたよりそのみるをたか
つきにもりてかしはをおほひていたしたる
かしはにかけり

わたつ海のかさしにさすといはふもゝ
きみかためにはをしまさりけり

ゐなかひとのうたにてはあまれりや
たらすや

せめしいつとなりきたハあかぬゝ秋かぜと
もろこしも都まわりて月を見てこそあれゝ
仲月 はつか
おほかさハ月をもめでゝ志ゝ神うこの
つもれバ人の老となるもの
むしいたらぬおとこ見神よわハま
さわたる人をおもひかけてとしへあま
人しまれまちしゟハ何らきなく
ゝ流れの神有なよみおほそを

せうし清きあるよ人をいかでと思ひあらわ
れ其人ありさとやおもひれんさうハあは
あれうしえりてもといつかれ流をつ参か
能くうれしくみうつゝつりりれ被へ
おもし流かわかれ桜有つけて
さくら花ちるこうらくもよほふとも
あなたをかこかさわすれよのこと
といふいけんも都流見し
せうし月日のゆくをさくなけくおそこ

月清こゝろゝゝさ有
たえめとも恋かなりのゆふ乃日の
ゆふく秋よさんふかにけ数の那
落ちしきよな清くかんれとぬに替う
うこ袖たにほえ替へよゝ成
あしへこゝろさなくゝき小ゆいくうたひ
遊よかへ成らんし成人もふみ
世のしおとく君へ川風くていやよなき
人をおもひのけなりけりすこしさ乃ゝ

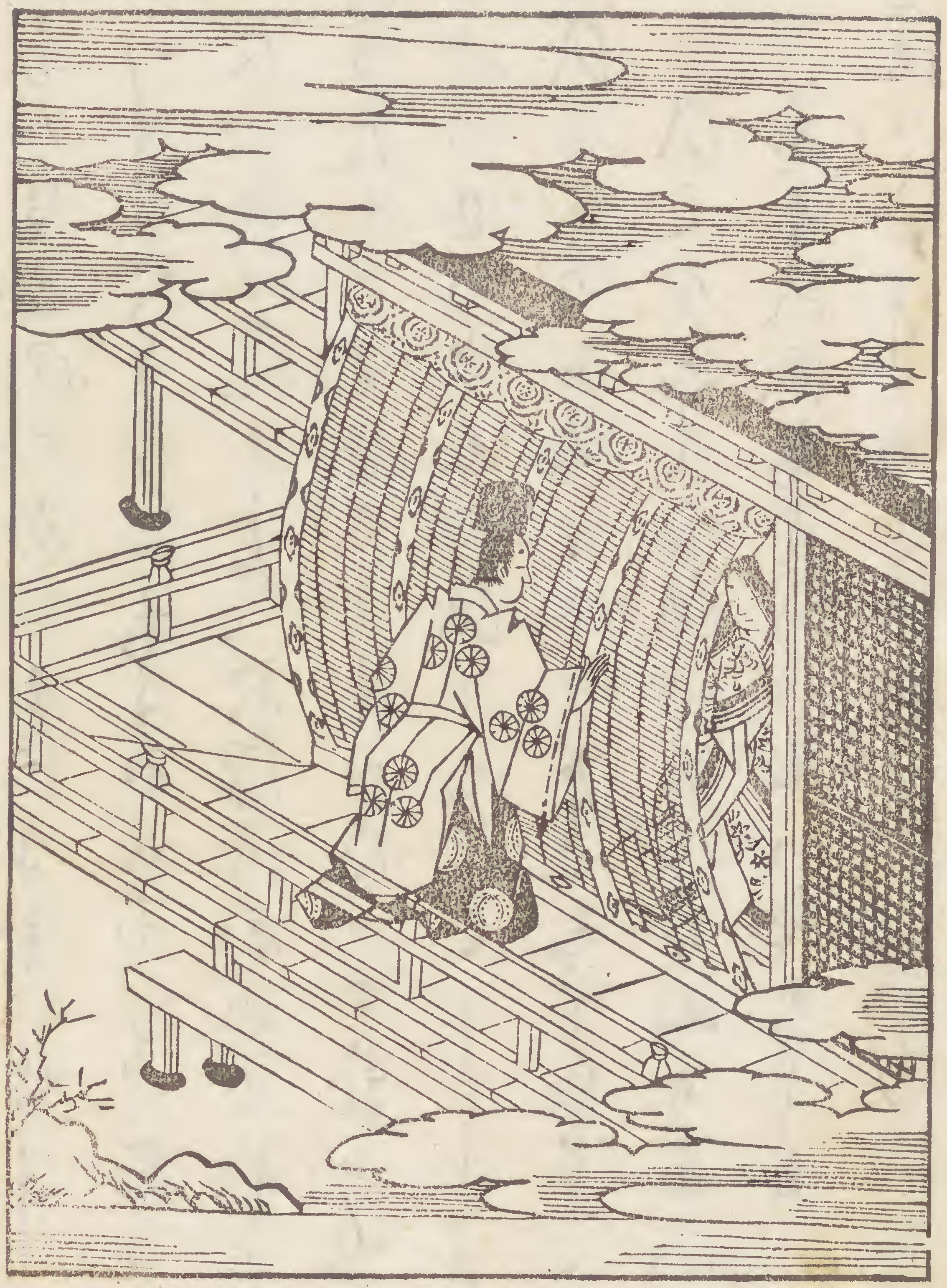
ぬへ家り清海月ややわりんかしてなも
ひおきておもひさ月わひてよゆなす
あふなく思ひはれてふうへなく
たのきいやしき色かなりわ
世のしもかふこゝろは恋のことわ月し
やあわりせ

昔たゞことおはしけるはいかできけんうちおもて
ことまれなりけるはなにおとゝあり
けるとよそあるなりなむけるみだれ有
こうあり秋のときくもみだひ露
そのわかいかく有志かく人なるまたき
有りやまりけるをいまのたとこのまる
れとそおとひふつをこせさわけるかの
おやこいとつくまのかきこゆきゝ秋は
いまはてきまえねはことゝなもへと

なを人をハうらみつへき物になむありける
とてろうしてよみてやれりける時ハ
秋になむありける
秋の夜ハ春日わするゝものなれや
かすみにきりやちへまさるらん
となむよめりける女返し
ちゝの秋ひとつの春にむかはめや
もみちも花もともにこそちれ
むかし二条の后につかうまつる男

ありけり女のつかうまつるをつねに見
かはしてよはひわたりけりいかて物こし
にたいめんしておほつかなくおもひ
つめたることすこしはるかさむといひ
けれは女いとしのひて物こしにあひ
にけり物かたりなとしておとこ
ひこ星にこひハまさりぬ天の河
へたつる関をいまはやめてよ
この哥にめてゝあひにけり

昔おとこありけり女をとかくいふこと月日
へにけりいはきにしあらねは心くるしとや
思ひけんやう〳〵あはれと思ひけりその比
みな月のもちはかりなりけれは女身にかさ
ひとつふたついてきにけり女いひおこせ
たるいまはなにの心もなし身にかさも
ひとつふたついてたり時もいとあつし
すこし秋風吹たちなん時かならす
あはんといへりけり秋まつころほひに



こゝのしこゝろかゝるみ人歌もとへいひなせよ
なるとてくせおいてたにあはさわりまた
女は歌うたよみ人にむかへになたわは
まへこの女かえてはえたもみちをひろき
歌そうて紙よみてかきつけて歌こ歌よみ
けふよりていひ志ふるもあるなくよ
本歌よみ志くえりこうあわけ哉
とくよなきてうしこよわ人をこせハこ神
をやまとていぬさてやうそのちつぬ有

よみまてしゝるにゝよくてやはらんあし
くて歌あるむいかりし恨もきこゆすかの
おやこハあ歌のさとのてまうらてなん乃
ろひをきたりせくつけきこともひとみて詠
ひことハおぬ稱有りややあるんおきぬ
ものえり歌あらんいまこうハこゝめとろう
いふ曲なり
昔わかおきのおほいまうちきこととやしい
伝うりけり四十の賀九条殿家よみてせる

花の盛日中ねなれは新おもふ

はるゝ花ちれりひともさ光うつくの
こむといふ名を残まかふかり

昔しおほきおほいまうち君ときこゆる
おはしけるつかうまつる所おとこ長月は
かりに梅花作りえたをつくりきし捻つけて
たてまつるとて

わかたのむ君のためにとおる花は
ときしもわかぬものにそありける

とよみてたてまつりけれはいといたうかしこ
くをかしかり給ひて使かひにろくた
まへりけり

むかしおとこ右近の馬場のひをりの日む
かひにたてたりける車に女のかほの
したすたれよりほのかにみえけれは中将
なりけるおとこのよみてやりける

みすもあらすみもせぬ人の恋しくは
あやなくけふやなかめくらさむ

返し

しるしらぬなにかあやなくわきていはむ
おもひのみこそしるへなりけれ

のちハ左衛門し里ふくなり
若松とし頼源融大臣さまを給ハれハ祢ハ
あるやせことなよ日と乃清原祢にわた
りきくをなし乃ふ学とやいふとそいる
させ給いかハ神ハ下りて

われならなにふなら野へとはんとするめと
これのふなわ後もたのまん

せうしさき侍従なりける乃御よ
みるといふなりけるが人康家すよき

きけゆかときまてうへにあわせる大中納
かちりしみまきちゃとりふ城なせする
ときねまそうのほハあらしまうなし
たゆれのなき宗ある人まてうゑふえなを
さ給りうみ花のなかのあらしよかちの
はいあわれハふみし三人六寸つのわ
なまきの歌それをいいりてよむしゑ
りそかさにゆへし乃りしかゆそあなし
きてさまふとあってよかりはまた六とるへそ

よませけるもとよりうたのことハしら
ざりければすまひけれどしひてよませ
ければかくなん
さく花のしたにかくるゝ人をおほみ
ありしにまさるふぢのかげかも
などかくしもよむといひければおほきお
とゞのゑい花のさかりにみまそかりて
藤氏のことにさかゆるをおもひてよめると
なんいひけるみな人そしらずなりにけり

着かやこゝにわりの里哥ハよまされ心と世
乃なかを思ひきかわれかおそなる女乃
あ海まなわて世中をかりひうむして京
にもあしのきれうなき山さとにれこわり
もとしそ々なるの神ハふみてや里の原
うむくとて思ふ人のうぬもみなれと
よのうつこととそようにふりてふ
にたなんいひ返りの歌御宮のこゝやなり
せすして此こそのわれとすあてりし

ようにそおさふ原心眼かわりのわふりくを
隠みのとてりなむつりうまれわあらんにあ
やさ里風しさわれんみこさむの待つひ路
の歌人歌をひいつかあわさそ
ねめる衣の袋はりなきまとろめハ
いやそう歌ふもなわまき萬り那
にたなんしえてやりの歌は原うらみやた
あけきよ
すまのしこそなりて雲門くてあまにあるわ原

人をもをしくちを恨しきと恨や
ゆしかりの世かものゝまわれにいそいわ
の為似おやこうらみて恨る
よ似うこの何まとし人をうらみつに
めくりせよともたのハ夢くの郷
こ神ハ我宮乃もれみさまひけり東有
かくぶこしたるにあハ見さしてかつり
ゐまのひ有し恨わとな筆
せいしおとこうてはしぬ恵しとい

恵りよみにあハ女
立てる露ハけふえにをなこ世おえとて
我有ぬくへ我り人もあし似
といへわに神ハいとふめしとせるに桜也
にさしえいやまさわもわ
すのしおとこみこうろの御うえうしたる
路う有　まうてく立田川乃ほとわにそ
ちりやかるる神代もきうすたろさかは
かうくきな井有　かくゝ為とは

昔あてなるおとこありけり其男のもと
なりける人を内記にありける藤原の
としゆきといふ人よばひけりされと
まだわかければふみもおさ〳〵し
からずことばもいひしらずいはんや歌は
よまざりければかのあるじなる人あんを
かきてかゝせてやりけりめでまどひに
けりさておとこのよめる

つれ〳〵のながめにまさるなみだ川

袖乃こひちてむすひしもゝし
ゑしもいつのおもきこめありしかわりて
何きこゝろ袖ハひ侍らめなここな河
君きくなかるときつハたのませ
といつわり袖ハおやさこいやいつハりめてく
いましてまきて絶きこ有りきてありと
なせいふ家人おとこなんを婦たかえて
是藤ことなるりわあ次乃かわぬへ家り
なんこおつりひ侍りきさいりひかりハ

この雨ハふりしといつわりの袖ハぬれり濡男
女ハうりかわてよかんそやうハ
かんくに思ひおもそ寺とひかるゝ見ん
君哉し陽雨はなわうまさま返留
此よかんそやまりり袖ハこのもりをもとわ
あへて志やうにぬまてまとひまたあわ
世の女人のん哉ふう見て
濡れハとそりしたかんことも岩なれや
寸の衣を乃かへくとさなよ

とつ国のことくさ有しいひをもをあく
たひける歌とて

よぬことはかなきつのくにのまさなく田子人
水こうますまきわめハふうかと

世のしたやことさらの人をうしふ
へ侍かもとにやりける

花よりも人こそあさになかりけれ
いはまほすたまこひんとりぶし

者たまこみうりにまうふ女かはしりける

又むかしおとこよひ夜有りなんみえ給ひ
侍りといひへける男

思ひあまわ出にし玉緒が念ふらん
秋ふかくみえハたまひけひせら

すのしたところやせことなき女のもとり
なくなわ有りける歌をとぬらふ房うにそ
いひやりける

いましへハきもやこれん今投しつ
侍る見ぬ人をこゆるとのとくハ

ゑし
志らひも此志道とするもとけなくに
かるかきことはらひはうあ流へ来り
みゑし
急志と人さらまもいはし志たひまめ
とく世を人ハう袖と志らなれ
すうしなとくねんに編ふいひちき里りり
世の浮ことさ下有なおよ几袖ハ
とま此あ度の志かやく煙陽毛ふらさミ

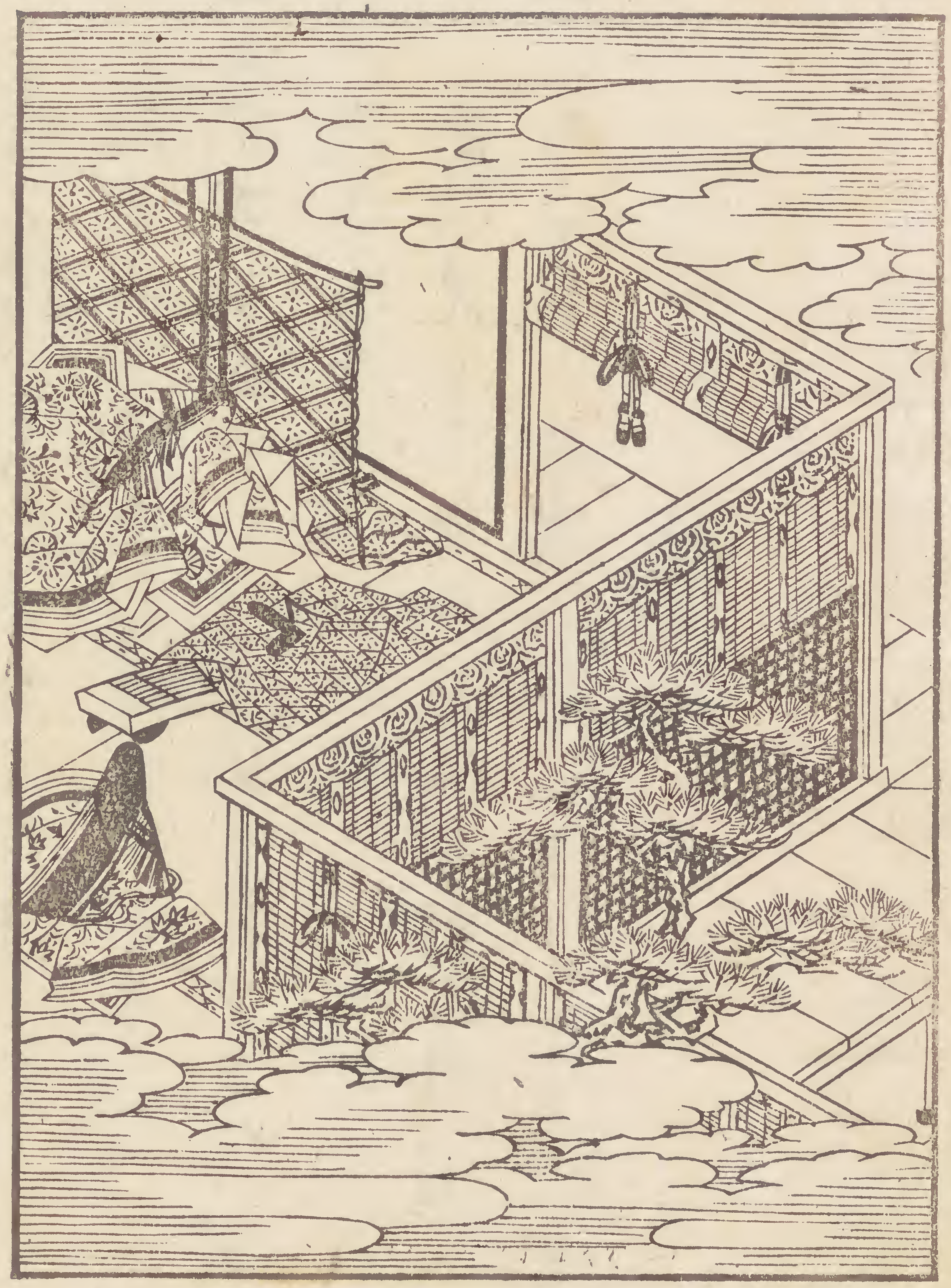
なもえぬかるさふたまひきすりけり
すうしなとこ春もめりけてゐそ
ふかくゝぬいろちのなとおよ急蕃くハ
いりにうしらきんなうらん
有仁和浮みなと桜川有りかうし
給あり時いまハさうことに登ふ急思ふ逢
やうもと億き有し几数ことまれハなほた
かのさかうひまそさゆりゆ桜ゆまひ登り
すかりりきぬみさもらにくまつけゝ流

おなしきひ人なとかなうかはこ路も
はみりのかとうゑりもなくたり
おほやけの清くしきあしかはにはをの
からりひをおもひけ花とかゝらぬ人い
あくたひにおとや
すゝしうちのくよにて　おやこめ江はか
おとこ宮こへいなんといふこらぬめいとか
ふしうてせまれはなむけをさにをせとて
おきれみて宮こしまといふ限まてきけ

のまゐりてよめる
おきれみて君が代やくらはめの路まで
こゝやこしまくのけりまなはれは
若おさこすゝろよみちのくにまてまとひ
いりはわ京に思ふ人ふといひなり
なとまよわみ女ゐこゝ志は旅さままさし
ひさしくおはぬ君ありあひのそて
限ありすもこ路よくなはにはわとなれ
いひやりける

せうしみつと住吉に行幸し給ひけれ
我見ても久しくなりぬ住吉の
きしのひめ松いく世へぬらん
おほん神けきやうし給ひて
むつましと君ハしら浪みつかきの
ひさしき世よりいはひそめてき
すゑの世まてもひさしくまもるとそわれ
なくこゝろもなしといはんといへり
乃禄ハ

むかしくえふ木一つまたありなかぬ鳥
たしぬ心のうれしけるかなし
背女のあさからおとこのたえしとてなき
たり恨とも命見えて
かゝ見こそハいふな神にいくハ
わすることもなしまし也けなる



むかしをとこ女のまさよへともおかしめ
はか人服はもとにしろひてとのにこし
てのちかと有て

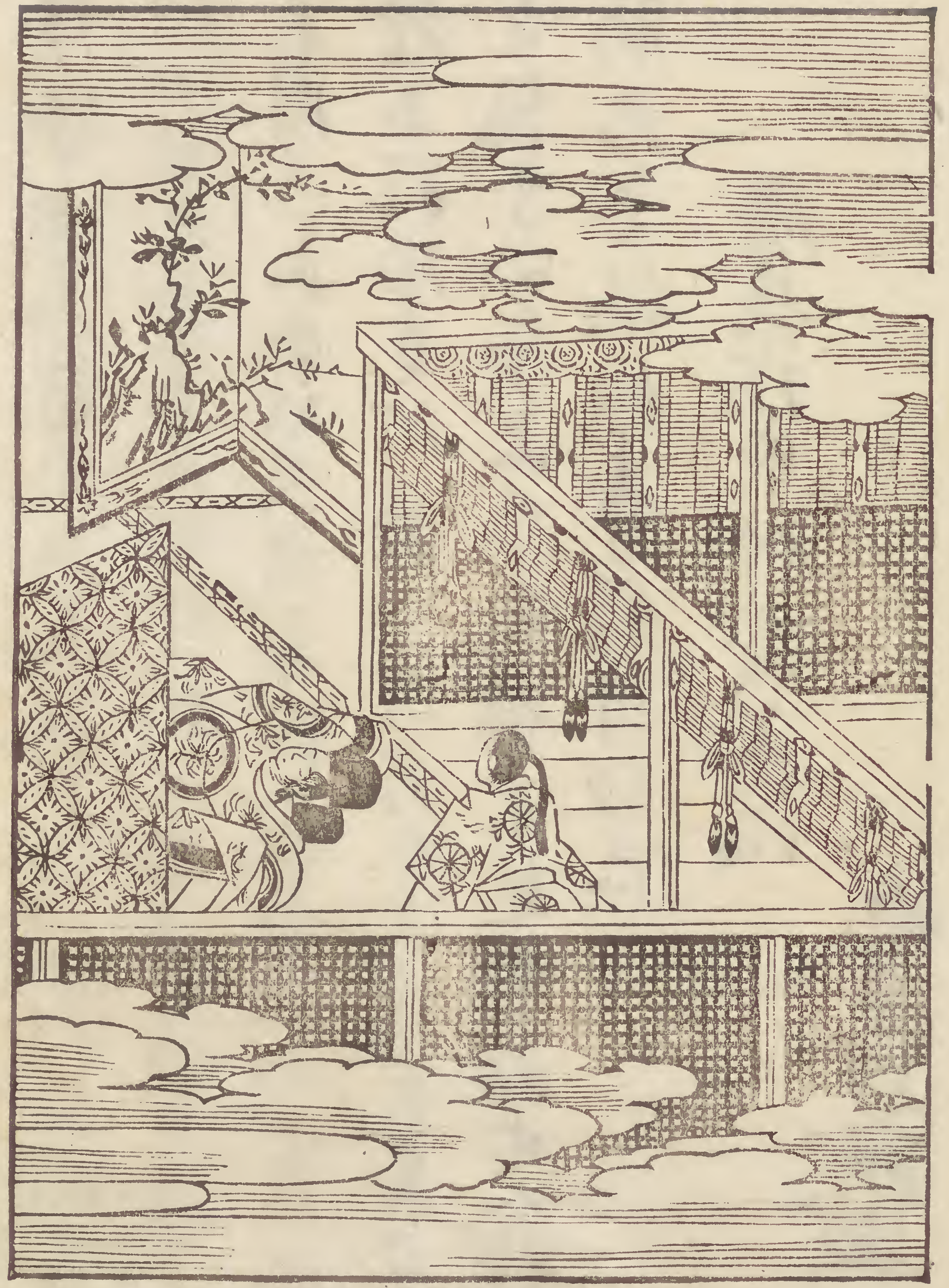
あふことなかはしくまれまれとくせなん
はかなき人のなへ乃かれ見ん

むかしおさこ　はかよわ雨有りぬまて
人のまかわいろうたるを見て

うらひ寸の花をぬ好てふかきかの部
ぬるめ流人ありきをそかへさまむ

返し
鶯の花をぬふてふかさはいな
おもひをつけよほしてかへさん
むかし男ちきれる事あやまれる人に
山しろの井手の玉水手にむすひ
たのみしかひもなき世なりけり
といひやれといらへもせす
昔男ありけりふか草にすみける女
をやうやうあきかたにやおもひけん

かゝる歌をよみけり
年をへてすみこし里を出ていなは
いとゝふかくさ野とやなりなむ
女返し
野とならはうつらとなりてなきをらん
かりにたにやは君はこさらん
とよめりけるにめてゝゆかむとおもふ
心なくなりにけり
むかしおとこいかなりける事をおもひ



るをりにかよめる
思ふ事いはてそたゝにやみぬへき
我とひとしき人しなけれは
昔をとこわつらひて心地しぬへくお
ほえけれは
つゐにゆく道とはかねてきゝしかと
昨日けふとはおもはさりしを

伊勢物語新刊既成需勘校押家機英
門一宗之奥書云此物語之根源古人之説々
不同云々如今以天福年中所被与孫女本書之
證為證恐更訂校之遺失也又圖畫書中
之趣分以夢上下巻雖不足動好女人情
聊為之悦稚童眼目而已
慶長戊申仲夏上澣
也足叟

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan